

2023年度 亶理町地域おこし協力隊 活動報告

亶理町地域おこし協力隊 久保田沙耶

2024.03.31

01 自己紹介

02 2023年度の活動方針

03 2023年度活動報告

03-1 亘理町の魅力の発掘・情報発信

03-2 アート作品の配布による地域住民の文化醸成

03-3 活動報告展示

04 来年度の活動計画

01 自己紹介

久保田 沙耶
Saya Kubota

Artist



Photo by JURYA IGARASHI



「鹿を歯医者に連れていく」2016
鹿、パラジウム合金、ミクストメディア
(左上)

「私の目には涙がこぼれる」2018
パフォーマンス
地球儀、ミラーガラス、ドローイング、ミクストメディア
(右上)

「漂流郵便局」2013-現在
アートプロジェクト
瀬戸内国際芸術祭
(左下)

「もぬけの息吹」2023
インスタレーション
AIRK Research Project vol.01
xorium、魚住 英司共同制作
(右下)

現代美術家。1987年茨城生まれ。宮城、兵庫、東京、鳥取などを拠点に活動。筑波大学芸術専門学群卒業。東京藝術大学大学院美術研究科修了後、同博士号取得。日々の何気ない光景や人との出会いによって生まれる記憶と言葉、それらを組み合わせることで生まれる新しいイメージやかたちを中心に、平面や立体作品、さらには独自の装置を用いたインスタレーションなど、様々なメディアを駆使しながら制作を続ける。主な個展「material witness」(大和日英基金)、主なプロジェクト「漂流郵便局」(瀬戸内国際芸術祭2013~)など。

02 2023年度の活動方針

2021, 2022年度はリサーチから得たイメージを元に絵画と随筆の創作を続けてきた。2023年度からは、かねてより制作を共に行ってきた魚住が正式に隊員となり、一つの土地でそれぞれの作品を呼応させながら巨理町にしかない場所、物、出来事作りをすることを目標とした。

2021, 2022年度

巨理町で琴線に触れたものを介して出会った方々にお話を聞き、そこから絵画「満月船」(巨理町住民に寄贈)と随筆「腐る宝石」(講談社文芸誌「群像」に掲載)を制作した。



2021, 2022年度

魚住英司隊員と郷土資料館にてプロジェクト過程の展示を実施。



2022年度

これまでのリサーチとこれからの展望を「巨理体験解体記録」として執筆。



アーティストとして活動してきた視点を活かし、その土地に住みながらよそ者だからこそ見つけれられる隠された地域資源を見つけ、それらに触発されながら作品を作るという巡りの中で、地域に一個人として深く潜り込むことで、亶理町だけでなく他のどの地域においても呼応するような活動をする。

地域の情報発信

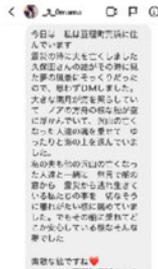
亶理町での暮らしの中で制作された作品を適切な形態で発表する。（展覧会、インターネットなど）

地域の活性化

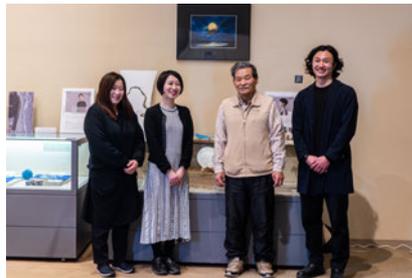
作品を介した地域住民とのコミュニケーションによってまた自分自身の制作の活性と地域の活性が重なりあっていく。



リサーチを介して制作した絵画「満月船」



Instagramに投稿したところ、津波被災にあわれた亶理住民の方が同じ夢を見たご連絡くださり、作品を寄贈し、亶理のことを深く教えていただく仲となった。



この絵のご縁で荒浜の元船大工の佐藤さんから復興船を購入し、それらを元に悠里館にて展覧会を行った。震災以来会っていない住民同士がたまたま出会う機会が作れたりなど、偶発的な流れの中で生まれたあらたな巡りに「地域おこし」というものの姿を見た気がする。

亶理町へ移住してから、リサーチや町民との触れ合いから町内で何度か展覧会を行ってきた。その度に亶理町の見え方が変わるとともに、私自身の価値観も変容してきている。芸術業を本業としてきた15年間で、より特異な地域おこし協力隊のあり方を亶理町で実践したい。一般的になされる「まちづくり」とは違った角度から、芸術家だからこそみつけられる亶理町の真の価値や、新たに生まれうるものを表現、発信してゆきたい。また「震災」「復興」「減災」についても、亶理町から日本全国に発信できるような視座を蓄えていくため、さまざまな災害についてリサーチを進めながら作品をよりよいものとした。



亶理住民として暮らしながら描いた絵一枚から偶発的に巡り出した亶理住民との関係と対話から、自然と個人個人の抱く亶理への想いを知るに至った。これまでの交流が記されている記事たち。このように自然発生的で地域に根をはるような活動を続けていく方針だ。

03 2023年度活動報告

1

巨理町の魅力の発掘・情報発信

地域資源及び特産品の発掘、開発及び販売促進

地域の情報発信

2

アート作品の配布による地域住民の文化醸成

地域資源及び特産品の発掘、開発及び販売促進

地域の活性化

3

2023年度活動成果報告

地域の情報発信

地域の活性化

絵本のための執筆と絵画の制作

巨理でのエッセイ執筆と、絵画作品の制作によって最終的に絵本として発表。魚住隊員と同じく「KEIKA BOOK」として作成。(2024年度までの2年間プロジェクト)

(仮)巨理のくらしを楽しむきっとキット制作

巨理町で私たちが暮らす中で見つけた「土地の楽しみ方」を凝縮した作品制作。最終的には地域住民とのコミュニケーションができるようキットの配布も検討。(2024年度までの2年間のプロジェクト)

郷土資料館での展示「未来の収蔵品」

プロジェクトの進捗共有と情報発信。「アート作品」という少し馴染みの少ないものを、「地産の郷土資源」として、「未来の収蔵品」と名付けることで私たちの活動が少しでも町民の皆さんにとって近い存在だと感じていただきたいと思います。

絵本のための絵画の制作とエッセイの執筆(KEIKA BOOK)

企画概要

2023.04時点

[Why]

巨理町で隊員として、一人の住民、アーティストとして生活していく中で湧き出たイメージを絵画とエッセイにすることで、目に見えない地域資源を発掘し、

[When,Who]

日々巨理で生まれたそれらの作品を依代にして町民と偶発的な出会いを果たすことで、作品の深度を持って互いの土地の記憶を共有する。

[What,How]

それぞれの作品を展示、発表する場を設け、生の作品を目にしながら、最終的にはそれらを町民が所有、あるいは体験できるような媒体に落とし込む。(2024年度までの2年間計画)

[Where]

制作した作品はイベントで展示を行う。まるごとフェアもしくは悠里館での展示を想定。
魚住との活動報告と合わせて同時期に制作したものとして共に発表の場を設ける予定。



町民との対話の中で、震災後、防潮堤によって海を遠く感じるという声を多く聞いた。防潮堤の内側を散歩していると潮風や磯の香りさえ塞がれていた。荒浜は巨理の代表的な遊び場であり、遊び場があることは、若い人が土地に残り二世帯住宅によって家が新しくなったり、遊びや同じ場所に集まることによって町民同士が顔を覚え、減災に置いて重要な役目を果たしてきたと言える。震災後、防潮堤の芝生の内側で、もしも海の煌めきを眺めることができたなら、たとえ高い壁があろうとも、塞がれているはずの防潮堤の向こうの海の潮騒を感じることができるのではないかと構想し、海の宝石である真珠を用いて、海の布を製作することから、モニュメントとしての作品を製作した。郷土資料館にて展示中。

防潮堤のこちら側のきらめき・荒浜水槽（海の布）

制作：2024

素材：布、インク、真珠、真珠塗料、ミクストメディア

※2024/02/24~2024/05/12 郷土資料館にて展示

「海の布」展示ステートメント・新たな荒浜の郷土歌の作詞作曲（郷土資料館にて展示）

防潮堤のこちら側の海のきらめき（真珠の布）実験

制作年：2023
素材：真珠、布、ミクストメディア

「未来の収蔵品展示に寄せて」

わたしはきっと、いつか防潮堤のこちら側に、荒浜のきらめく水面を連れてきて贈り物にするだろう。

「すべてすべて流すった、神様なんておらなんだ」

「防潮堤が高く海が見えなくなってから、夜眠れないので波音のする機械を買ったのよ」

「いまま嬉しいのはなぜだろう」

互理町に引越してきて、見聞きした言葉のメモを読み返していた。

これを読んでいるあなたは、いつもどんなふうにして眠れない夜をやりすごしてきましたか？ 私は、失うことばかりじゃないとわかっているのに、なんだか諦めそうになる悲しい夜を、これからもずっとこんなふうにしてやりすごしていくのかと思うと怖い。このままなんて嫌なので、繰り返してみえる日常とあるひと時に、なんらかの光を当ててみることはできないかと模索しはじめました。そうすれば、これからたとえどんなことが起ころうとも、すべてのことははっきりと見える姿でしか現れないと直感しはじめたからです。

真っ暗な夜には、祖母の形見の指輪の真珠も輝きもしない、宝石としてなんの役にもしません。でも実は、この瞬間が最も私安心できる瞬間でもあったりします。私たちは当たり前のように光を見ていますが、それはその瞬間の光であって、光自体は本当はとてもはやすぎて、中指につけている真珠の指輪の輝きをどんなに見たくても到底私の手では捕まえられっこありません。それは、ここで自分もみんなもちっけであると誰かに言われているようで、ともすれば、ちっけだからこそ、自分の感覚だけは守っていいと言われているようでもあり、すこし安心するので。

地域おこし協力隊として、私はなにか震災で失ったものを補うためにここにいと当初は思っていましたが、それはなんだか今ではおこましく感じます。それに、そんなことは到底できるものではないとも思ってきています。それは、外から引越してきた私と、ここに住み続けるみなさんとで、様々な違いを教えあえることに喜びを感じはじめたところから

そう思えるようになりました。さまざまな世界の表れが事実ここにあるのだと教えてもらうには、自分と同じような人間と話していても仕方がありません。その二つの世界のありようの違いを感じるからこそ、生活の肌触りを豊かにします。もしそんな風にもっと日常を豊かに感じられたら、防潮堤の内側にも最後にはもう一つの海の輝きを眺めることだってできると思えるほどです。

贈り物をした人は、実のところ贈り物を受け取る人よりもずっと大きな何かを受け取っているのではないのでしょうか？ ここにある収蔵品たちも、資料的価値の有無とは別のところで、収蔵したありとあらゆる人々の心に実りを与えていると思います。なぜかというそれは現に私に起こっていることだからです。ここに移り住んで根をおろし、真珠でできた水面を未来の収蔵品として贈りたいと思えることは私自身を救っています。

真珠は海の宝石と呼ばれますが、実際は母貝が砂つぶなどの異物が混入したときに、体を傷つけまいと、何層も何層も透明な涙のような膜で異物を包み込み、なめらかにして、異物と共存しようと試みた結果もたらされた輝きだと知りました。そんな災いと必死に向き合った輝きでさえも、暗闇の中では私たちは見る事ができません。でもわたしは、それをまだ悲しいこととは思えません。悲しみの時代を生きることはそれぞれ、例えようのない愛を生みます。それはどこにいても消えず、懐かしんだり、慈しんだり、許しあったりすることができる。互理での生活で私は見聞きしてきました。それはなんだか、見えないこともみようとする気持ちの強さと同じように思えます。

だからこそ、私は黒い布に真珠と真珠を溶かしたような絵の具で、届かない光を描くことができました。触れることのできないものをなぞるのは、すこし寂しいことでもありました。でも、この一枚の真珠の水面のざこちなさを手がかりに、防潮堤の内側で見えなくなった海のきらめきも、聞こえなくなった波音も、嗅ぐことのできなくなった潮香も、感じようと試みたいと思えるくらいに強くなりました。それは、暗闇で祖母の指輪の輝きを見ることができなくても、あの輝きがあるのだと懐かしみながら人しれず心を育む瞬間とどこか似ています。

いつかわたしはきっと、防潮堤のこちら側に、荒浜のきらめく水面を連れてきて、贈り物にしたいです。その手がかりのために、この真珠でできた水光のテクスチャーと、波を掴むささやかな歌だけでも、惣里館に未来の収蔵品として展示させていただけることを、大変光栄に思います。

2024年2月 久保田沙耶

「波摘み唄」

友さん 友さん
海 みにいこや
潮香 潮騒 潮風を
五感を ぜんぶ みじん切りにして
心澄ませば 見えてくる

波はわれらの お手本さまよ
人の心の いましめよ
泡は潔白 水面は愛で
波打ち際は 心徳よ

くらくたかい防潮堤に
聞こえた 海鳴り ふさがれて
人の心と体もふさぐ
コンクリートを にくまずに

見える海など いくらもあれど
見たい海は 荒浜よ

友よ 我らも この世の海よ
真珠のように 輝くよ
真珠はみるみる 涙が落ちる
落ちし真珠は 水光よ
人のさかいの みめよき波も
今日は私のなかにある





魚住隊員との共同展示を郷土資料館にて開催

リサーチを共に行ってきた魚住と、それぞれの作品を同一の場所で展示することにより、土地の多角的な捉え方を示すとともに、魚住隊員の作品からインスピレーションを得てエッセイを執筆することで、巨理という土地が個人を通して形作られたものにより、また新たなものが作られていくという連鎖的な想像の中で、新たな巨理の顔を見つけていく。



引っ越してきたアパートのベランダでタバコを吸う。私たちがこの部屋を選んだ理由のうちの一つは、窓から野原が見えることだった。スズメやヒヨドリ、セキレイたちが自由に野原にやっていたり、風が吹いて草がゆれたり、季節によって色が変わるその景色の微細な変化を楽しんでいた。去年、急に工事がはじまり、野原はたちまち3分の2以上がアスファルトで固められ、一軒家の住宅が軒押し、新しく立ち並んだ。工事の影響で水の味も落ち、日陰も増え、鳥もこなくなり、私はそのことにひどく心を落とした。けれど今日ほじめて、私はこの景色をふいに「決して悪くない風景だ」と思った。その理由はおそらく、昨日完成した魚住の KEIKA BOOK を手にしたからだと直感する。私はこれを安易に「アート作品」とも「絵日記」とも「記録集」とも呼びたくない。このテキストを書きながら、その自分自身の心証について、考えてみたいと思っている。

巨理町に移住し、この家を借りて約2年が経つ。毎日の終わりに、魚住は必ず1日1枚、いつもおな

れた木はどんな首をたてたのだらうと、どうしても思いを馳せてしまう。そこに存在し、失われることもなく、誰の目にもふれないものに、なにか心と物のありかたにおいて、もしくは心の滅災として、何らかの可能性を予感している。しかし同時に何事でもないような何事かが常に起きていくということの膨大さに対して、どんなに言葉を紡いだところで、無力であるとも感じている。でもそうやって振みつけているくらいの方が、今これを読んでいるあなたの気持ちをわることができるような気がしている。どんなにばらばらのかげりでも、KEIKA BOOK のように一冊で繋げることもできるのだから。

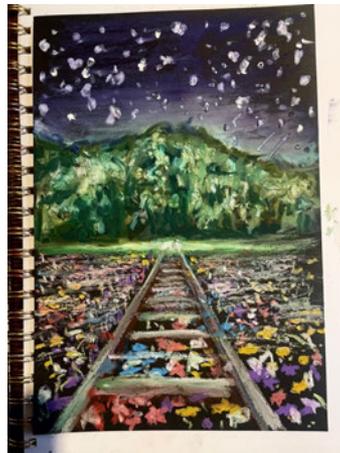
2024年2月 久保田沙耶

エッセイ「珪化する生活」

KEIKA BOOK によせて (抜粋)

郷土資料館で魚住隊員が販売を検討している「KEIKA BOOK 写本」の巻末に掲載、郷土資料館にて展示中。

亶理の花である「さざんか」をモチーフに絵画作品、亶理での白屋夢のスケッチ、いちご農家さんのやり取りから制作寄贈した作品など。悠里館への絵画作品寄贈や町民への作品寄贈、エッセイや絵本に今後使用するためのイメージとして絵画制作を続ける。



(仮)亶理のくらしを楽しむきっとキット制作

企画概要

2023.04時点

[Why]

「遊び」というものは、様々な環境に順応する能力を育てるものであり、亶理で生み出した遊び方や暮らしの楽しみ方を知ることは減災につながっていく。

[What]

亶理をリサーチしながら、昔からあったこの土地の楽しみ方を再解釈して、それらが実際に展開できるようなキットを制作する。

[Who,How]

制作した作品は住民への配布を通して地域の魅力をまずは住民から感じてもらう（数量は50個程度検討）。美術館で見るアートではなく、暮らしの中で楽しむことができる作品で文化醸成に寄与する。

[Where, When]

魚住隊員との協働で2年間の制作期間を用い、最終的にリサーチの対象である神戸と亶理の両地区での完成巡回展やトークショーを実施する。

2023年度は「被災」や「復興」をやり遂げた土地の魅力に焦点を絞り、同様の土地である亶理町内外から亶理町を多角的に見られるようリサーチを行いながら、亶理発であり日本列島全体に通底する土地のあり方を考察し、作品化していく。



荒浜の海岸で見つけた落書きされた貝。「被災地」という名前から感じ取れる悲壮感とは裏腹に、現実では苦難を乗り越えた強くしなやかな住人が暮らし、日常の中の間人らしいユーモラスな情景を見つけることができる。そんな中で、「被災」「復興」を超えたところに現在存在する亶理の土地と人間の魅力を発掘するため、今後も町内のリサーチとイメージスケッチ、テキストや絵画、写真での記録を続けていく。



「海の布」制作中に見つけた鳥の海の水面に映る太陽光の窓の反射による四角い煌めき。防潮堤の内側に海の煌めきを持ってくるためのアイデアスケッチ。

「わたりごとオブジェクト」のプロトタイプ制作。（一部、郷土資料館にて展示中。これらの発展形をキットの中に入れることも検討中。

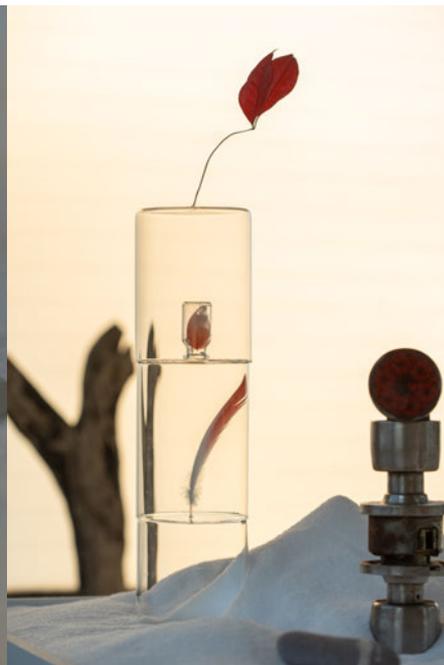
巨理の住民からのヒアリングの中で気になった言葉を荒浜で拾った漂流物や、これらの物語に関連する私物と組み合わせた立体を制作。



「わける/わからない/わかる/わかれる」の石水晶、テキスト、ミクストメディア



「金色の時間」の時計
祖母の時計、金箔、ミクストメディア



「鳥の海の塔」
落ち葉、鳥の羽、ミクストメディア



「いまでも嬉しいのはなぜ」電球
荒浜の漂流物、テキスト、βミクストメディア

郷土資料館での展示「未来の収蔵品」 2024.02.24 ~ 2024.05.12

2023年度のプロジェクト進捗報告として郷土資料館の第26回収蔵品展と同時開催という形で「未来の収蔵品」展示を実施。巨理町の方々に見ていただける機会を作ると同時に町外の方の接点を創出した。



(左)
会場全体

(右上)
KEIKA BOOK

(右下)
防波堤のこちら側の海の
きらめき(真珠の布)
実験

第26回

収蔵資料展

同時
開催

地域おこし協力隊住・久保田隊員の作品展示

未来への収蔵品

開催期間

令和6年2月24日(土)～5月12日(日)
午前9時～午後4時30分(入館は午後4時まで)

観覧料
無料

巨理町立郷土資料館

〒989-2351 宮城県巨理郡巨理町字西郷140番地
TEL 0223-34-8701 URL <https://www.town.watari.miyagi.jp/>



「収蔵資料展」観覧のご案内

期間：令和6年2月24日(土)～5月12日(日)

収蔵資料展は、郷土資料館に収蔵されている資料を寄贈年度ごとに一括展示する展覧会です。

今回の展示資料は、令和2年度に寄贈された資料107点です。互理伊達家当主伊達邦成の書や衣食住に関わる資料、小中学校で使用された教科書や卒業アルバムなど当時のくらしを伝える品々も展示します。

互理伊達家の歴史を伝える品々や、人びとの生活を支えたちよつと昔のつなつたい品々から現在のの違いなどを見つけ、楽しみながらご覧ください。

同時開催「未来への収蔵品」

互理町地域おこし協力隊として活動しているアーティストの魚住英司氏、久保田沙耶氏は2022、2023年に郷土資料館で作品の展示をし、今回再び展示を行います。互理町で暮らす中で出会った人・風景・歴史などを通し感じたことや大事にしたいことをアートという形で表現するプロジェクトに取り組んでおり、今回の展示ではそのプロジェクトの過程を共有する場としています。

プロジェクトを通して“今の互理町”を見ている視点が、「この先もしかしたら郷土資料と呼ばれるようなものになるかもしれない、未来の収蔵資料になるかもしれない」ということを思い、ぜひ皆様の身近な暮らしの中にあるきらめきを展示から感じてください。

→「防波堤のこちら側の海のきらめき(真珠の布)実装」
制作：久保田沙耶氏 インスタレーション：魚住英司氏



巨理町立郷土資料館 〒989-2351 宮城県巨理郡巨理町字西郷140番地
TEL 0223-34-8701 URL <https://www.town.watari.miyagi.jp/>

◆期間中の休館日
2月26日
3月4・11・18・20・25・29日
4月1・8・15・22・26日

◆駐車場
歴史館の北側にあります。

互理町地域おこし協力隊
協力隊だより

地域おこし協力隊として町に居住し、
それぞれの視点から町おこしに取り組み
隊員たちの日々の活動をお届けします。

魚住隊員の SNS
Instagram: @sna_sna
Twitter: @sna_sna

「未来への収蔵品」展覧会

制作：魚住英司氏
展示：魚住英司氏、久保田沙耶氏

「未来への収蔵品」として、互理町で暮らす中で出会った人・風景・歴史などを通し感じたことや大事にしたいことをアートという形で表現するプロジェクトの過程を共有する場としています。

「KEIKA BOOK」
制作：魚住英司氏
展示：魚住英司氏、久保田沙耶氏

「防波堤のこちら側の海のきらめき(真珠の布)実装」
制作：久保田沙耶氏
展示：魚住英司氏、久保田沙耶氏

☆☆☆ 2月21日(土) 開催！ 第2回 WATARI BAND FES ☆☆☆

昨年引き続き、WATARI BAND FES 第2回は互理町青年会と協賛し、企業や個人で集まった、地元愛好家を中心に、みんなが楽しめるイベントを開催します。

☆開催内容☆
1. 抽選会
2. 抽選されたバンドのライブ演奏
3. 抽選されたバンドのライブ演奏の模様をライブ配信
4. 抽選されたバンドのライブ演奏の模様をライブ配信

企画：企画課(〒34-0505)

04 来年度の活動計画

2023年度開始当初に予定していたキット制作を継続的に行うと同時に、地域の魅力を対外的にアピールできる取り組みを新規立ち上げを検討中。

2023年度

1 亘理町の魅力の発掘・情報発信
絵本、エッセイ (KEIKA BOOK)
の制作

進行中

>>>

アップ
デート

去年度と同様に絵画とエッセイによる記録を続け、推敲、発表できる形態へのブラッシュアップに入る。

2 アート作品の配布による地域住民の文化醸成
(仮)亘理のくらしを楽しむきっとキット制作

進行中

>>>

継続

当初予定通りリサーチに基づいたキットの制作を継続実施し作品化する。

3 2023年度活動成果報告
郷土資料館資料館展示「未来の収蔵品」

進行中

>>>

アップ
デート

来年度の発表の機会は適宜検討を行い、最適な形で実施。

+

新規

1にて制作した絵画を最終形態として原画を悠里館へ寄贈を検討

Thank you